平成２６年度郷土歴史講座

「越谷市内とその周辺の庚申塔」

講師 加藤　幸一 氏

（ＮＰＯ法人　越谷市郷土研究会顧問）

郷土の歴史について、わかりやすくお話をしていただきます

		日程	時間	募集	内容	場所	参加費	備考
Aコース / Bコース	第1回	5月14日(水)	午後2時 ～午後4時	80人 定員	講座	市立図書館 2階 視聴覚ホール	無料	Aコース受講の方は必ず2日間ご参加ください
Aコース / Bコース	第2回	5月21日(水)						
Aコース	第3回	5月28日(水) または 6月 4日(水)	午前9時 ～午後5時 (予定)	各日 20人 定員	現地研修 (バス乗車)	越谷市内とその周辺の歴史めぐり	保険料等	現地研修は各日同内容です 希望日をお書きください

申込方法

◎新料金の往復はがきでお申し込みください

○受付期間　4月30日(水)市立図書館必着

○記入事項

① Aコース：講座と現地研修　　3日間コース

Bコース：講座のみ　　2日間コース

※Aコース(現地研修の希望日をお書きください) か Bコースをご明記ください

※現地研修のみの申込みはできません

②郵便番号　③住所　④受講希望者氏名(1枚につき1人)　⑤電話番号

※希望者多数の場合は抽選となります

あて先・問い合わせ先

〒343－0023　越谷市東越谷4－9－1

越谷市立図書館　郷土歴史講座担当

【電話　048－965－2655】

庚申信仰と庚申塔

越谷市郷土研究会　加藤幸一

一・　庚申塔とは何か　～庚申信仰の記念として建てられた～

庚申信仰の起こりは、人間の体の中に潜んでいる「三尸」（さんし）と言われる上尸（じょうし）・中尸（ちゅうし）・下尸（げし）の三匹の三匹の尸虫（しちゅう）が、六十日に一度やってくる干支の庚申の日の夜に、人の睡眠中に口から抜け出して天に昇り、その人が日頃犯した罪を天帝に暴く。するとその報告をもとに判断して、それに応じて命を縮めて若死にさせたりする。それゆえ六十日ごとにくる庚申の日の夜は三尸（さんし）の虫が身体から抜け出る機会を与えないように寝てはならないという。天帝とは北斗七星をさす。後世帝釈天との説も見られる。

平安時代は貴族の間で碁・詩歌・管弦の遊びを催して夜を過ごす「守庚申」（しゅこうしん）という行事が行われ、鎌倉時代にはいると武士の間にも広まった。室町時代の後期あたりになると名称を変えて「庚申待」（こうしんまち）という礼拝対象となる神仏が登場し会食談義を行って徹宵する行事が一般庶民の間で行われた。

江戸時代になると庶民の間にも広がり、庚申講の仲間達が一堂に会し、仏教的な宗教儀礼を通しての行事となり、徹夜して過ごして鶏の鳴き声が聞こえる頃に解散することが行われた。その庚申信仰の記念として建立された石塔が庚申塔である。道端や辻、寺社の敷地内、墓地、個人の屋敷内等に建てられた。なお、徹宵する理由は、三尸が鬼の姿に変わって病気の息を吹きかけられないようにとの考えもみられた。

庚申信仰は、全国津々浦々で庶民の間で盛んに行われ、その結果、庚申塔も沖縄県と種子島を除く北は北海道の礼文島（れぶんとう）から南は鹿児島県の悪石島（あくせきじま）まで建立された。しかし、明治に入ると庚申信仰は仏教関係の行事として廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）のあおりを受けてであろうか、急に衰え、庚申塔の建立もほとんど見られなくなり今日に至っている。

十干十二支（じっかんじゅうにし）と庚申（かのえさる）

よく今年の干支（えと）は何年かとか、生まれは何年かなどと今でも十二支が使われている。十二支とは

子（ね・シ）、丑（うし・チュウ）、寅（とら・イン）、卯（う・ボウ）、辰（たつ・シン）、巳（み・シ）、午（うま・ゴ）、未（ひつじ・ビ）、申（さる・シン）、酉（とり・ユウ）、戌（いぬ・ジュツ）、亥（い・ガイ）

をいうのはご存じの通りである。これに十干（じっかん）である

甲（きのえ・コウ）、乙（きのと・オツ、十干十二支として組み合わせて読むときは「イツ」）、丙（ひのえ・ヘイ）、丁（ひのと・テイ）、戊（つちのえ・ボ）、己（つちのと・キ）、庚（かのえ・コウ）、辛（かのと・シン）、壬（みずのえ・ジン）、癸（みずのと・キ）

を組み合わせたものが十干十二支、つまり干支（カンシ・えと）と呼ばれる。現代では干支（えと）というと十二支のみをさしている。

干支の組み合わせは、

甲子（きのえね・カッシ、コウシとは言わない）、乙丑（きのとうし・イッチュウ、オツチュウとは言わない）、丙寅（ひのえとら・ヘイイン）、丁卯（ひのとう・テイボウ）、戊辰（つちのえたつ・ボシン）、己巳（つちのとみ・キシ）、庚午（かのえうま・コウゴ）、辛未（かのとひつじ・シンビ）、壬申（みずのえさる・ジンシン）、癸酉（みずのととり・キユウ）、甲戌（きのえいぬ・コウジュツ）、乙亥（きのとい・イツガイ、オツガイとは言わない）、丙子（ひのえね・ヘイシ）・・・・

と言うようにしていく。十干と十二支の組み合わせは全部で六十通りとなる。これで年や日をあらわした。これによると甲子から始めると六十回目に癸亥（みずのとい・キガイ）となり、一巡して六十一回目に再び甲子（きのえね・カッシ）に戻る。庚申（かのえさる・コウシン）の年や日も六十年や六十日ごとに一度やってくるのである。それゆえ数え年で六十一才（満六十才）を迎えて還暦の祝いをするのは生まれてから干支が一巡したことを意味している。

一一・　代表的な庚申塔の型式　～日月・青面金剛・二鶏・三猿～

寛文年間（一六六一～一六七二）頃から庚申塔の建立が目立ち始めると同時に、青面金剛と呼ばれる仏様を描いた庚申塔がよく見られるようになる。そして元禄年間（一六八八～一七〇三）の頃になると、庚申塔建立の大ブームとなり、この頃、『日月（じつげつ）・青面金剛（しょうめんこんごう）・二鶏（にけい）・三猿（さんえん）』の型式が完成す

る。つまり中央に青面金剛像、上部の左右に日月（太陽と月）、下部に三猿が刻まれ、中には青面金剛の両側下に二鶏が刻まれていることもある。庚申様と言うと青面金剛を一般に指すようになるのもこの頃である。

青面金剛は怒りを込めた顔付きで、腕が六本もあって、そのうち四本の手には左右にそれぞれ弓と矢、輪宝（りんぼう・車輪の形をして八方に矛先が出ていて、相手に向けて投げて倒す武器）と矛を持ち、中央二本の手は合掌している（合掌型）。また、右手に剣、左手に人（一説に「ショケラ」と呼ばれる女性）の髪の毛をつかまえ、その人をぶら下げている（剣人型）ものもある。

青面金剛は本来伝尸（でんし・結核）を防ぐ仏様であるが、庚申信仰の三尸退治と結び付いて庚申信仰の主尊となったのである。

次は、平成十一年二月十四日、足立区郷土博物館で小花波（こばなわ）平六氏が講演した内容である。

［ http://members.jcom.home.ne.jp/ho-weka/sub03.htm ］より取得。

（前略）どうして青面金剛が庚申になったかといいますと、青面金剛は伝染病を予防したり、治す仏様だからです。その伝染病は誰が起こすかといいますと三尸の虫で、肺結核が非常に多かった。原因は三尸九虫といって沢山いますが、その尸という虫がゴホッ、ゴホッという咳で移る。するとまたその咳で、その虫が飛んできてそれを吸って肺結核になって青白くなって死んでしまう。ところがこの青面金剛という仏様はその肺結核の尸という虫を退治してくれる。（略）　この青面金剛はどこの国の仏様なのか。（略）　敦煌というところに沢山の仏像があり、２４９窟の天井に阿修羅が太陽と月を持ち上げて立っている像が描かれています。この青面金剛は陀羅尼集経という経典にありますが、そのもとは敦煌の阿修羅神じゃないかと私は思います。

ア．日月

日月は初期の庚申塔にはあまり見られないが、後になるとかなり多く見られるようになる。向かって右側が日（太陽）、左側が月が一般的である。そして両者の区別が判別しやすいように日は円形、月は三日月として描かれていることが多い。しかし、日月が共に円形に描かれたり、日月の位置が左右逆のものもある。日月は初期の庚申塔にはあまり見られない。

なぜ庚申塔に日月が描かれるようになったかよくわかっていないが、中世に盛んであった日待（ひまち）・月待（つきまち）の影響を受けたのであるとか、日月は徹夜を表わすために描かれるようになったとか考えられている。

イ．鬼

青面金剛に踏みつぶされている鬼は、四天王像に踏みつぶされている鬼である天邪鬼(あまのじゃく)から連想して描かれたと考えられている。

ウ．二鶏

鶏は古来から時（夜明）を告げる神聖な鳥とされていたのであるが、鶏が描かれるようになった理由は、庚申待の行事で徹夜した翌朝が酉の日であるからと考えられている。そして鶏が鳴くと夜が明けたと解して庚申待の講を解散するところもあったのである。一方、鶏は青面金剛の使者であるとの俗説もみられた。

二鶏が描かれていない庚申塔も見られ、また描かれていても線刻で何の鳥かわからない程ごく簡単に描かれているものも多く見られる。

エ．猿

山の神ともされている猿は山王権現（さんのうごんげん・山王様）の使者とされ、山王信仰の象徴となっていた。この山王権現の猿が庚申の『申』と結び付いて庚申信仰にはいってきたと推定されている。そのよい例として申待（さるまち）と刻まれた二十一仏板碑があげられる。二十一仏は山王信仰の仏様たちである。

猿は江戸時代初期の庚申塔に早くも描かれてくるが、一猿や二猿のものが多く見られた。その後間もなく三尸の「三」の影響を受けてであろうか、見ざる・聞かざる・言わざるの三猿型式に定まっていく。この三猿型式は、日光東照宮の三猿からきているとの説があるが、疑わしい。

オ．二猿

次は、平成十一年二月十四日、足立区郷土博物館で小花波（こばなわ）平六氏が講演した内容である。

［ http://members.jcom.home.ne.jp/ho-waka/sub03.htm ］より取得。

庚申塔の猿は山王信仰の影響を受けて成立したとの説に従って説明している。そして三猿について次のように述べている。

なぜ三匹の猿が庚申塔にいるかといいますと、（略）北斗七星が人間の寿命つかさどる（略）。その北斗七星が地上に降りてきたのを祀ったのが山王の神様、山王七社というものは北斗七星を地上に祀ったものです。その山王様のお使いは誰かといいますとお猿さんなのです。そこでお猿さんを拝むようになった。だから最初は三匹の猿ではないのです。（略）古い庚申塔を見ると一猿、二猿が比較的に多く見られる。

猿の伝来は中国から日本に渡ってきたのは鎌倉時代で、三猿の姿できていたのです。（略）「悪いことは言わない、見ない、聞かない」を猿の形をしたものがインド、ライブール・ミュージアム博物館にあるのです。インドの中部で発見されたものです。ですから悪いことを見ざる・言わざる・聞かざるは日本で作られたものではありませんし、これは古代インドの人が創作し造って鎌倉時代に仏教と共に日本に入ってきたのです。

・関東の庚申塔の三猿は関西の三猿信仰の影響を受けて成立

以下の解説は、インターネットの

「koktok.web.fc2.com/hom_page/sekibutu/aomen/sanen.htm」を参考にした。

東海道の京都の入口にある粟田口の庚申堂について考察している。京都の青蓮院記録「華頂要記」に「寛永七（一六三〇）年三月再建、一堂安置三猿、称御猿堂、後年加青面金剛像」とある。そして、その三猿の配置は、寛永十年（一六三三）発行の「尤の草子」に「中尊はいわ猿とて口をふさぎており、脇立ちはみ猿、きか猿なり」とある。

つまり、寛永七年（一六三〇）三月に再建されたこの庚申堂には当初は三猿しか祀っていなく「お猿堂（三猿堂）」と呼ばれ、中央上部に言わ猿、両脇に見猿とか聞か猿が三角配置され、訴訟の時などに祈願すると相手の目や口を塞ぐので勝利が得られるとの信仰であった。後年になって追加して青面金剛も祀るようになり、庚申堂と呼ばれるようになった。

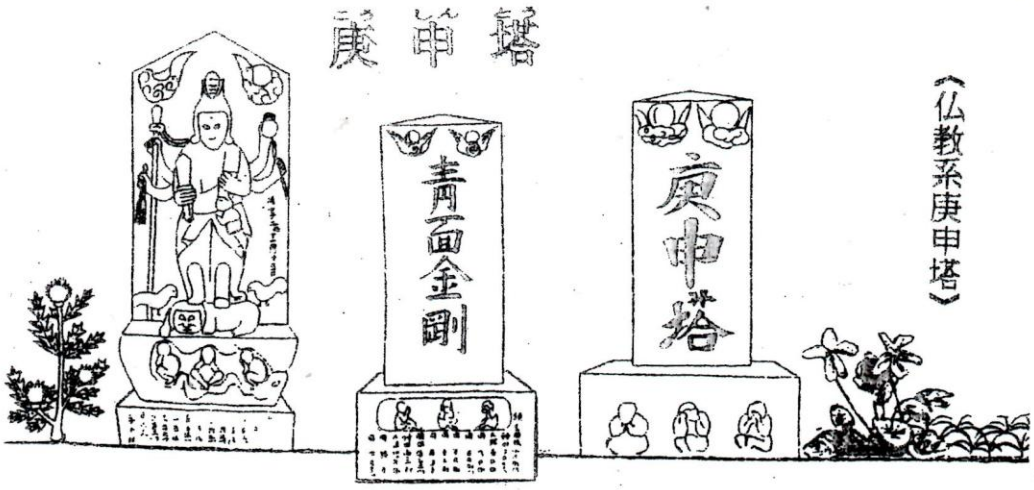
この影響を受けたのが関東の茅ヶ崎にある輪光寺の三猿庚申塔で、粟田口の三猿塔と同様に三角配置されている。中央上部が聞か猿、両脇に見猿と言わ猿である。寛永十七年（一六四〇）に造立された現存する最古の三猿庚申塔と言える。

輪光寺の

三猿庚申塔

写真提供　秦野秀明氏

関西の粟田口の三猿塔と関東の茅ヶ崎市の三猿庚申塔との大きな違いは、関東の方が三猿とも烏帽子をかぶっていることである。三猿が烏帽子をかぶったり、御幣を持ったりするのは関東において山王信仰の影響を受けているからと考えられている。関西の三猿塔は、三角配置が一般的であるが、山王信仰の影響を受けた三猿塔はみられないようである。それに対して関東の三猿塔は三角配置ではなく横並びが一般的で、山王信仰の影響を受けた三猿塔も見られる。



〈仏教系庚申塔〉

〈神道（しんとう）系庚申塔〉

三猿は関東では横並びしていることが多い

猿田彦像庚申塔

二、「陀羅尼集経」で説かれている青面金剛

この経典『陀羅尼集経（だらにじっきょう）』の「大青面金剛呪法」に説く青面金剛の姿・形とは砕けた表現で訳してみると次の通りである。

身体には四本の腕があって、上の左手には三股叉（さんこさ・原文は三叉戟「さんさげき」）を下の左手には棒を持ち上の右手には法輪を下の右手には羂索（けんじゃく）を持つ。身体の色は青色で、口を大きく張って牙を上に出し、血のように真っ赤な目をして三つ目となっている。頭の上には髑髏を載せ、髪の毛は炎のように逆立っていて大蛇を巻き付かせている。両腕からは竜を一頭ずつぶら下げていて、それらの竜の頭は互いに向き合っている。腰には二匹の大きな赤蛇をまとっている。両脚や両腕にも同じく大きな赤蛇をまとっている。左手に持っている棒の上には大蛇が絡み付いている。虎の皮を股にゆったりとまとっている。髑髏の瓔珞（首飾り・胸飾り）を首に掛けている。

一身四手。左辺上手把三股叉。下手把棒。右辺上手掌拈一輪。下手把羂索。其身青色。面大張口。狗牙上出。眼赤如血面有三眼。頂戴髑髏。頭髪聳堅如火焔色。頂纏大蛇。両腕各有倒懸一竜。竜頭相向。其像腰纏二大赤蛇。両脚腕上亦纏大赤蛇。所把棒上亦纏大蛇。虎皮縵胯。髑髏瓔珞。

また、青面金剛像に付随するものについて次のように続けて説いている。青面金剛像の両脚の足下にはそれぞれ鬼を踏み潰している。その像の左右両辺に、各々一人の青衣の童子を成す。髪の毛は揚げ巻きにし、手には香炉を持つ。その像の右辺に二人の夜叉（やしゃ・薬叉）を成す。一つは赤、一つは黄、刀を執り索を執る。その像の左辺に二人の夜叉を成す。一つは白、一つは黒。（ほこ・馬上で持つ短めの矛）を執り、叉（さすまた）を執る。形状はどれも恐ろしい。手足の爪は長く鋭い。

実際の庚申塔に描かれている青面金剛の図柄は、以上のように陀羅尼集経に説かれた図柄とは違いが大きい。

四、庚申信仰の起こり　～奈良時代頃からか～

わが国の庚申信仰は平安時代にすでに始まっていたことが文献からわかる。

庚申信仰のことが記録上初めて出てくるのは比叡山延暦寺の円仁（えんにん・天台宗山門派の祖）の『入唐求法巡礼行記（にっとうぐほうじゅ

んれいこうき）』である。承和五年（八三八）十一月二十六日の記事の中に「正月庚申」と出てくる。このころ既に貴族の間で正月の庚申の夜に庚申信仰の徹宵行事である『守庚申（しゅこうしん・まもりこうしん）』を行っていたのであろう。

中国の道教が日本に伝来したのは、仏教の伝来（五三八年説、五五二年説）よりやや遅れて伝来したとか推定されている。わが国の庚申信仰は道教の三尸（さんし）説の影響を受けたものである。それゆえ、奈良時代にはすでに貴族社会の間で始められていたと考えられている。

五、平安時代の貴族の庚申信仰　～貴族の間で行われた守庚申～

この頃の宮中や貴族の間で広まった庚申信仰の行事の『守庚申』（しゅこうしん）を『御庚申御遊（おこうしんおあそび）』『御庚申』等と称していた。詩歌管弦の遊びなどをして庚申の夜を明かしたのであろう。

なお宮中での『守庚申』の内容が『庚申信仰』（平野実著、角川書店）の二二頁に紹介され、また『栄華物語』の花山の巻の中にも『正月庚申』の行事についても紹介されている。

当時は宮中や貴族たち、さらにその下の身分の者までもが各自分の家で守庚申を行っていたのであろう。

六、鎌倉時代の武士の庚申信仰　～武家の間にも広まる守庚申～

守庚申は貴族の間だけでなく、武士の間にも広まっていったと推定される。『吾妻鏡（あずまかがみ）』に建暦三年（一二一三）三月大十九日、「庚申、天晴、今夜御所で庚申を守られる御会あり。」とある。京風を尊ぶ三代将軍源実朝の時である。すでに実朝の頃に守庚申が武士の間で行われ始めていたのであろう。

七、室町時代の庶民の庚申信仰　～仏教と結び付く庚申待へ～

庚申信仰は貴族や武士だけではなく一般庶民の間にも広がっていき、その行事を『申待（さるまち）』と呼ばれていたようである。申待とは、甲子待（きのえねまち）を子待（ねまち）と省略するように、『庚申待（かのえさるまち・コウシンまち）』を略した名称である。申待という言葉は文献では『親俊日記』に天文七年（一五三八）六月十八日の条に見られ、石造物では庚申待板碑に見られる。

守庚申では、礼拝の対象はなかったが、僧侶が作った「庚申縁起」によって仏教的な宗教儀礼を伴う行事へと変化していった。さらに当時の関東で特にみられていた夜念仏（よねんぶつ）や月待（つきまち）と同様に仏教的な宗教儀礼や会食談義も伴うようになっていった。これが庚申待である。

次は、平成十一年二月十四日、足立区郷土博物館で小花波（こばなわ）平六氏が講演した内容である。

室町時代の中期なって庚申縁起というものがつくられ、仏教的な儀礼がおこなわれるようになりました。そうして一番最初に作られたのは右の写真のような板碑です。写真の板碑は川口市にある実相寺の板碑で文明三年（一四七一）のものです。この板碑は川口市内の水田から出土されたもので上の部分と左側が欠けていますが釈迦如来と薬師如来の種子と「奉申待供養結衆」が刻されています。二番目に古い板碑は足立区の郷土博物館に展示されている「奉庚申待供養結衆」と刻されている文明十五年、三番目に古い板碑は練馬区にあります「奉申待結衆」と刻されています長享三年（一四八八）の板碑です。いずれにしても、このように拝む対象ができたということですね。

庚申経が源となって三尸神、北斗七星、山王権現、猿になって猿田彦太神になる。もう一つは庚申縁起から帝釈天やいろいろな仏さまや青面金剛になります。このように拝む対象が変わっていくわけですが、これがどのように変わっていったかをお話します。（略）

ちょうど応仁文明の頃に戦乱で京都からお公家さんとかお坊さんが関東に来て川越とか、隅田川とか、この荒川の近くに住んだので関東には[守庚申の]関東式のものをと考えて、ただ[徹夜して]起きているだけではつまらないからと「庚申縁起」に示されたいろいろな仏様を拝むようになりました。これが関東に最初に庚申塔[庚申待板碑]が造立された理由なんですね。

夜の戌亥の八時から十時には文殊と薬師と大日さまを拝みなさい。十二時から夜中の二時には青面金剛とお釈迦さまを拝みなさい。それから夜明けの四時から六時には観音さまと阿弥陀さまを拝みなさいとあります。こういうように「庚申縁起」というものが出来まして、何時にはこういう仏様を拝みなさいというようになりました。だから庚申塔には阿弥陀さまと観音さまとかがありますが、特にお地蔵さまが多いです。（後略）※[　]内は加藤が加筆

八・ 庚申石造物としてはわが国最初の『庚申待板碑』

庚申信仰の行事である申待の文字が当時の板碑にも見られ始めてきた。つまり『庚申待板碑』である。

ア・わが国最初のの庚申石造物 〜庚申待板碑〜

わが国最初の庚申信仰の石造物は、室町時代の中頃になって「庚申縁起」が作られ、仏教的な宗教儀礼を伴う庚申信仰へと変化し、当時盛んに造立されていた板碑に「申待」などと刻まれた「庚申待板碑」である。申待とは庚申待のことである。

最古の庚申待板碑は文明三年（一四七一）の川口市にある実相寺所蔵の庚申待板碑である。釈迦如来と薬師如来の種子（しゅじ、仏や菩薩を表わす梵字）と「奉申待供養結衆」の文字が刻まれている。二番目に古い庚申待板碑は、足立区立郷土博物館所蔵の文明十五年で、「奉庚申待供養結衆」と刻まれている。三番目に古い庚申待板碑は練馬区春日町にある長享二年（一四八八）で、「奉申待結衆」と刻まれている。かつては最古の庚申待板碑と思われていた。その庚申待板碑について次に紹介する。

長享二年の板碑には上部に主尊の梵字マン（文珠菩薩）と刻まれ、その下部には 次の銘文が刻まれている。

梵字マン　融秀阿闍梨　道弥門　与一五郎　右馬五郎
与一三郎　六郎三郎　長享二年
奉申待供養結衆　彦八　戊申
弥右太郎　又二郎　十月廿九日
右衛門四郎　助六　平次五郎　孫八　平六

『奉申待供養結衆』の中に「申待」と「結衆」の文字がみられる。「結衆(けっしゅ)」は後の江戸時代の寛文年間（一六六一〜一六七二）頃から「講中(こうじゅう)」とも呼ばれるようになり、その後「講中」となる。

融秀阿闍梨は、村人たちに庚申信仰の功徳を説いた僧侶であろう。

イ・埼玉県越谷市内の庚申待板碑（越谷市金石資料集による）

天文二十一年（一五五二）　図像阿弥陀三尊板碑
「奉庚申待供養」と刻まれる
西方（にしかた）日枝（ひえ）神社

天文二十二年（一五五三）　図像阿弥陀三尊板碑
「奉庚申待供養」と刻まれる
東方（ひがしかた）仲立墓地

天文二十三年（一五五四）　十三仏板碑（主尊は種子バクの釈迦）
十三仏とは不動明王（法事では初七日）に始まって虚空蔵菩薩（三十三回忌）までの十三仏
「奉庚申待供養」と刻まれる
西方田向（たむかい）墓地

永禄元年（一五五八）　二十一仏板碑（主尊はタラークの虚空蔵）
二十一仏とは比叡山の山王（さんのう）二十一社の本地仏をいう
「□□供養」と刻まれる、「申待供養」か？
北越谷4−5−17のホワイトヒルズそば

元亀三年（一五七二）　二十一仏板碑（主尊はタラークの虚空蔵）
西方道祖神社

天正二年（一五七四）　釈迦三尊種子板碑
「申待供養」と刻まれる
中島道路端

天正三年（一五七五）　二十一仏板碑（主尊はタラークの虚空蔵）
「申待供養」と刻まれる
増森（ましもり）薬師堂、県指定文化財

天正三年（一五七五）　二十一仏板碑（主尊はバクの釈迦）
「申待供養」と刻まれる
東小林（現、東越谷）浜野博一氏所蔵

天正三年（一五七五）　二十一仏板碑（主尊はバクの釈迦）
「申待供養」と刻まれる
千疋（せんびき）東養寺

天正六年（一五七八）　二十一仏板碑（主尊はバクの釈迦）
増林上組墓地、現在所在不明

年号不祥　二十一仏板碑（主尊はタラークの虚空蔵）
越ケ谷御殿道路端

※以上、「越谷市金石資料集」（越谷市教育委員会）より

九・　室町時代末期の板碑から塔へ変遷の開始　～庚申塔の出現～

板碑の製作は室町時代末期になると急に衰え、江戸時代初期には全く作られなくなる。板碑の一種である庚申待板碑も同様なことが言える。室町時代末期は庚申待板碑の衰微にともない、代わって庚申塔が出現してくる。『奉庚申待供養』などと文字が刻まれた庚申塔である。

十・　江戸時代初期の庚申塔　～主尊はまだ一定していない～

江戸時代にはいると板碑は全く消滅し、当然庚申待板碑も製作されていない。庚申塔が庚申待板碑にとって代わられている。

江戸時代初期の庚申塔は板碑型が多く見られ、過半数を占めている。庚申待板碑の影響であろう。

庚申塔の主尊は、阿弥陀如来（阿弥陀三尊も含む）や地蔵菩薩が多くみられる。それぞれ約三割程度である。その他の主尊として、薬師如来、大日（だいにち）如来など様々である。このように庚申塔の主尊はまだ一定していない。つまり庚申様は誰なのかまだはっきりと決まっていないのである。

室町時代に庚申信仰が僧侶や修験者（しゅげんじゃ）などを通して庶民の間に広まっていくと、いつのころからか庚申の夜に神仏を拝むようになり、その時の神仏はこれと言って定まっておらず、阿弥陀様であったり、地蔵様であったり、大日様であったりしたのであろう。これが江戸時代初期まで続いてきたのである。

十一・　江戸時代寛文年間の庚申塔ブーム　～青面金剛の出現～

寛文年間（一六六一～一六七二）になると庚申塔が盛んに造立されるようになる。そしてその主尊として青面金剛像と呼ばれる仏様が描かれたり、その種子であるウーン（梵字）が刻まれたりするようになる。つまりこの頃になると主尊は阿弥陀如来や地蔵菩薩だけでなく青面金剛が見られ始めたのである。寛文年間以前の青面金剛は珍しい。

庚申信仰で青面金剛が主尊になった理由は、陀羅尼集経に出ている青面金剛が伝尸（でんし）の病（今で言う肺結核）を治す仏様であったが、この伝尸と庚申信仰の三尸との語呂が似ているために庚申信仰と結び付き主尊になったと思われている。

塔型も板碑型の他に笠付き型の庚申塔も多く見られ始めるのである。

十二・　元禄年間の庚申塔ブーム　～日月・青面金剛・二鶏・三猿～

元禄年間（一六八八～一七〇四）は庚申塔造立の最盛期となる。主尊は多くは青面金剛となる。そして庚申様は青面金剛だとの考えが定着する。青面金剛は二手・四手などもあるが、六手が圧倒的に多い。こうして『日月・青面金剛・二鶏・三猿』の基本形が完成し、庚申塔造立の大ブームが始まるのである。

また、この頃から庚申塔が道端や辻などによく建てられるようになると、道しるべを兼ねる庚申塔もでてくるようになる。越谷市内では西方三五三一の葛西用水取水口にある享保八年（一七二三）の庚申塔が道しるべを兼ねた庚申塔としては最も古い。

一二・　江戸時代中期から末期の庚申塔

ア・文字庚申塔

像容を刻まずに、ただ『庚申』『庚申塔』『青面金剛』というように大きく刻まれた文字庚申塔があるが、寛政の改革の質素倹約の影響を受けて庚申塔の中で文字庚申塔が寛政年間から多くを占めるようになった。

なお、関東では自然石に刻まれた文字庚申塔もよく見られる。

イ・百庚申

数にものをいわせ、たくさん作ればそれだけ多くの功徳もあろうかと百観音・五百羅漢・千体地蔵等が見られるが、庚申信仰もその影響を受けていて例外ではない。それが百庚申である。百基の庚申塔を造立して功徳を得ようとしたのである。寛政十二年（一八〇〇）の庚申の年から始まったと推定されている。越谷市内では、相模町六丁目の大聖寺（だいしょうじ）にある天保六年（一八三五）の百基（現存は九十七基）の庚申塔とそれらを統括し供養する天保九年（一八三八）の百庚申供養塔がある。

十四・　その他の主尊の庚申塔

ア・猿田彦と庚申塔

猿田彦命（さるだひこのみこと）とは天孫が降臨するときの道案内をした神である。つまり、天孫ニニギノミコト（天照大神の孫）が高天原（たかまがはら）から葦原中国（あしはらのなかつくに）の日向国（ひゅうがのくに）高千穂（たかちほ）の峰（みね）に降りてこられる途中の

天界からの分かれ道である天八衢（あまのやちまた）にいて、そこから葦原中国への道案内をしたという。『八衢』とは「八つの道（ち）の股」という意味。「八」は数が多いことをさしている。

神道の猿田彦を庚申信仰の主尊にかつぎ出したのは、江戸時代前期の儒学者山崎闇斎（あんさい・一六一八～一六八二）である。猿田彦が庶民の間に庚申様として浸透するのは江戸時代後期まで待つことになる。

次は、平成十一年二月十四日、足立区郷土博物館で小花波（こばなわ）平六氏が講演した内容である。

江戸時代の初めの頃、山崎闇斎という人が手が六本もあるような仏様（青面金剛をさす）を拝むことは日本人のやることではない。日本人はすべからく日本の神様を拝みなさいと説いたのです。万治三年（一六六〇）の頃から言い出しまして、「日本人は猿田彦太神を拝むのが本当の信仰なのだ。手が六本もあるような仏様を拝むのは日本人じゃない」ということで一生懸命布教しました。

猿田彦の庚申塔で最古のものと思われているのが埼玉県三郷市にある。寛文九年（一六六九）板碑型の石塔で、中央に『申田彦大神』と刻まれている文字庚申塔である。

猿田彦の庚申塔は江戸時代初期のものは大変珍しく、江戸時代末期に造立されたものが多い。

越谷市内には猿田彦の庚申塔は「越谷市金石資料集」によると二十一基程ある（明治以降の庚申塔二基を含む）。すべて文字『猿田彦大神（おおかみ）』（一基のみ「猿田毘古大神」）と刻まれた石塔である。明和五年（一七六八）が最も古く、次は文化四年（一八〇七）となり、江戸時代後期に多く見られている。

イ・　帝釈天と庚申塔

安永八年（一七七九）に、江戸郊外の柴又村（現、葛飾区柴又町）の日蓮宗の寺院題経寺（柴又の帝釈天）で、本堂を改修したとき偶然屋根裏から帝釈天の仏様を刻んだと思われる木版を発見。その日が庚申の日であったと言う。帝釈天は一説に人々を救うために青面金剛を下界に遣わしたとされている。この帝釈天と当時大流行であった庚申信仰と結び付き、江戸の人々の人気を集め、多くの人々が柴又もうでにやって来るようになった。帝釈天を主尊とした庚申塔は、寛文年間頃から見られてはいたが、ここにきて日蓮宗系寺院で帝釈天の庚申信仰が盛んになった。

ウ・　山王権現と庚申塔

山王権現を主尊とした庚申塔である。「山王権現」と刻まれている。山王権現の庚申塔は、千葉県の旧君津郡地方や神奈川県の三浦半島及びその周辺にみられる。

エ・　富士講と孝心塔

小谷三志は富士講を不二道孝心講という一派を組織して富士講を広めて言ったが、この時「孝心」の大切なことを説き広めた。「孝心」と「庚申」の音が同じことから、この影響が庚申塔にも見られることもある。庚申塔の上部に富士山の姿を描いたり、「孝心」という文字が刻まれていたりするのがそうである。越谷市内では、向畑（むこうばたけ）の観音堂にある明治二年（一八六九）の庚申塔に「孝心で庚申さまをよくおがめ　ねむりての身はすぐにかうしん」と刻まれている。

オ・　塞神（さえのかみ）塔と庚申

「日本石仏事典」（庚申懇話会編、雄山閣発行）の「塞神塔」の項で荒井広祐（ひろすけ）氏は次のように解説している。

サエノカミは通例、道祖神（どうそじん）・幸神（さいのかみ）・歳神（さいのかみ）・賽神（さいのかみ）・障神（さいのかみ）などと記される。「塞神」の字を当てたのは江戸末期の国学者平田篤胤である。彼は、当時盛んであった庚申信仰を、復古神道（しんとう）の立場からこれを平安初期の延喜式四時祭の一つである道饗祭（みちあえのまつり）に比定した。道饗祭とは外から侵入する妖魅悪神を塞ぎ給う八衢比古（やちまたひこ）・八衢比売（やちまたひめ）・久那斗（くなと）の塞神三柱を祀って京都の守護を祈願する祭儀である。篤胤は庚申待を廃して六月と十二月に道饗祭を行うこと、庚申塔造立の際は塞神三柱の御名を彫り付けることを彼の著書である『玉だすき』のなかで提言している。『玉だすき』の校者は「師のかく教諭さるゝも既に数年に成りぬれば、心ある人々は一速く塞神三柱の御名にかき改めて立てたるも数所出来にたり」と追記している。『玉だすき』の草稿は文化八年（一八一一）になるから、おそくも文政年間（一八一八～三〇）には塞神塔の造立が見られたものと思われる。

（途中、省略する）

在来の庚申塔の表面を削除して「塞神」の文字を刻んだ塞神塔が埼玉県行田市周辺に多い。行田市の庚申塔の三分の一は塞神塔に改造されている。これらは明治初年に忍藩（おしはん）の行った神仏分離政策の落とし子であり、全国的に見ても特異な存在である。これら一連の塞神塔は年紀銘が在来のままであったためか、従来改刻に気付かれずにいたものである。（以下、省略する）

なお、越谷市内では忍藩の飛び地であった柿木領八ケ村の見田方地区に改刻塞神塔が見られる。「越谷市金石資料集」一四三ページの一行目を参照のこと。

十五・江戸時代の庚申講

庚申講の講中（こうじゅう）たちが庚申の日の夜、当番に当たった家に集まって来る。番に当たった家では、まえもって床の間を清め、そこに青面金剛や三猿などが描かれた庚申掛け軸を掛け、灯明や花・線香・お供物（くもつ）などを供えた。

この掛け軸の前に集まった講中の人々は、庚申掛け軸に向けて一斉にお経を読んだりする。僧侶をわざわざ招いて呪文やら般若心経を唱えてもらうこともある。それが終わると講中一同がごちそうを食べたり、お酒を飲んだりして世間話に花を咲かせて徹夜して楽しく過ごすのである。呪文としては庚申の真言（しんごん）があげられる。地域によって多少の違いがあるが「オコーシンデ、コーシンデ、マイタリ、マイタリ、ソワカ」（津軽地方）、地方によっては「オコーシンテイ」、「マイトリ」などともいう。庚申待に参加できるのは男子のみで、女子は月経や出産があるため汚らわしいとされて講に立ち入ることを禁止されていたのが一般的である。例外もあるが、このように庚申講は男子のみの講であるといえる。庚申待の行事は娯楽的な性格の強いもので、時には酒を飲んでばか騒ぎしたり、博打をこっそりとやるところもあった。庚申待は、娯楽機関の発達していなかった当時の人々の楽しみの一つであった。

なお、掛け軸は猿田彦を主尊としている講中は猿田彦大神、帝釈天を主尊としているところは帝釈天が表されている。青面金剛や帝釈天は仏教的な庚申待となるが、猿田彦の場合は神道的な庚申待となる。

十六・青面金剛のご利益と禁忌

青面金剛の御利益（ごりやく）としては、定朝（じょうちょう）作と言われる「青面金剛上師十誓願」を紹介する。

青面金剛上師十誓願

弐　願福徳者可令得福徳
弐　願智恵者可令得智恵
三　願官位者可令得宦位
四　願長命者可令得長命
五　願愛敬者可令得愛敬
六　願子孫者可令得子孫繁昌
七　願眷属者可令得眷属衆多
八　願防火盗者可令得火盗雙除
九　願諸病悉除者可令得諸病悉除
十　願仏果菩提者可令得仏果菩提

青面金剛上師十誓願が刻まれた石碑が越谷市内に残っている。相模町七丁目にある福寿院跡地に天保九年（一八三八）に造立された自然石の石碑である。

「庚申」の文字うち、十干の「庚」は金（かね）の性質を持つといい、また十二支の「申」も金の性質を持つという。「庚」と「申」の金と金とが衝突して火が出て非常に悪いという。庚申の日は、悪いから何事にも慎まないといけないという。

禁忌としては、庚申の夜に男女がとも寝してはいけないとか、庚申の日には女子は裁ち物をしてはいけない、夜なべをしてはいけない、おはぐろをつけてはいけない、出産のあった家で講をしてはいけない、などが見られた。

また、庚申の夜に不義密通したり、盗みをしたりすると必ず露見すると言われた。

庚申の夜に男女がとも寝して性行為してはいけない理由は、この日にもし妊娠すると生まれてくる子は盗人になるといわれているからである。大盗賊で有名な石川五右衛門（ごえもん）を生んだ親は、庚申の夜を忘れてとも寝したためとか、五右衛門は申年の申の日の申の刻に生まれた

とか、庚申の日に生まれたとの俗説が見られた。
庚申の日に生まれるのがよくないとする地方では、庚申の日に生まれた子を形式的に捨て子をするところもある。また金（かね）に困って盗賊にならないようにと、男子なら銀之助・鉄太郎など、女子ならおかね・おぎんなどと名前に金（かね）に関係のある文字を添えた。夏目漱石の本名は夏目金之助であるが、慶応三年一月五日の庚申の日に生まれたためである。

十七．庚申と七

庚申と七の数字は縁がある。庚申様に供える七色菓子（全部で七色をそろえた七種類菓子、実際には七種類の菓子）、七人で庚申講を組織し、また七人で庚申塔を造立する、七カ所の庚申塔や庚申堂を巡る七庚申参りなどがみられた。

一八．女子の庚申講

庚申講は一般には男子のみで構成されるが、例外として女子のみからなる庚申講が越谷市内で見られるので、次にその庚申塔を紹介する。
三野宮の一乗院の参道にある天保四年（一八三三）の庚申塔にはすべて女性の名前が刻まれている。世話人も女性である。次の通りである。

［左側面］

天保四 癸 巳正月吉日

［正面］

（日月）青面金剛（三猿）

［右側面］

三ノ宮村

講中

［台石］

坂巻内きよ
須賀内ほの
同　々せき
倉橋々ふぢ
金子々ゆり
同　々はる
尾崎々とみ
根岸々さき
同　々しし
坂巻々ひさ
同　々のよ
鈴木々よし

世話人

［台石］

尾崎内かう
坂巻々そて
榎本々まつ
坂巻々てつ
同　々はつ
同　々きん
同　々みよ
同　々さん
森田々さん
同　々かん
同　々この
小嶋々まつ

補説1．道教

道教とは古代中国の土俗信仰が発展して宗教化したもので、現世利益（りやく）や不老不死を説いている。中国では現在も形を変えて民間宗教として広く行われているそうである。

補説2．「ショケラ」の初見

窪徳忠氏の「庚申信仰」（昭和三十一年）の中にみられる。
その中で、福井県美浜町麻生で掛け軸に描かれた上半身が裸の女性像を「ショケラ」として紹介している。

※主に参考にした書籍は

・平野実著『庚申信仰』
（角川書店、昭和四十四年初版・昭和五十四年八版発行）
・日本石仏協会編集『日本石仏図典』（国書刊行会）
・小花波平六氏が平成十一年二月に足立区郷土博物館で行った講演内容
この資料は、平成八年頃に平野実氏の『庚申信仰』を土台にしてまとめあげたものに、小花波平六氏の講演内容を付け加えて改定したものです。なお、改訂にあたって秦野秀明氏の協力を得る。
・小花波平六「庚申信仰礼拝対象の変遷」、小花波平六編『庚申信仰』（民衆宗教史叢書第17巻）、雄山閣、1988、p. 141-171。
・「埼玉史談」第四十六巻　第四号の森春男著「ショケラ考」

平成二十六年五月　　加藤幸一